



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

2020年8月16日 年間第20主日A年

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書 56章1、6-7節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 11章13-15,22-32節

福音朗読：マタイによる福音書 15章21-28節

## 今日のテーマ：異邦人を救う神

### 三つの朗読から

三つの朗読に共通するのは、第一に「異邦人」です。異邦人とはイスラエルの神を信じていない人のことです。福音書に登録する「カナンカナンの女」(マタ15章22節)は、神の救いの手からもれた異邦人の代表格です。しかし、第一朗読にあるように、その異邦人が神さまから受け入れられます。こうして神さまがおられる神殿しんてんは「すべての民の祈りの家」(イザ56章7節)となっていくます。第二朗読では、逆にパウロが自分は「異邦人のための使徒」(ロマ11章13節)であると宣言します。だから、異邦人が救われているのを見て、同胞であるユダヤ人も「ねたみ」(14節)を起こして、神の救いの手の中に入ってほしいと願っているのです。

さらに三つの朗読に共通する第二の点は、神の救いの想い、救いの計画です。第一朗読ではイスラエルの民が救われて、続いて異邦人が救われていきます。第二朗読では逆に異邦人が救われて、それによってユダヤ人も救われていきます。いずれも神さまの救いの計画によるものです。福音では一見するとイエスさまの女性への対応は冷ややかなようにも見えます。それは、イエスさまは「イスラエルの家の失われた羊」(マタ15章24節)のために働くのが自分の使命だと理解しているからです。それでも、「カナンカナンの女」は、神の救いの想い、計画は異邦人にも向かっているのだと確信をもって主張します。そんな女性の信仰にイエスさまのこころは動いたのです。すべての人は、神

の救いの想い、計画の元にあるのです。

今日の聖句：

小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです

今日の福音に登場する女性には、イエスさまに近づくためのさまざまなハードルがありました。女性であるということ。カナンというイスラエルから見ると異邦人であること。その異邦人が「主よ、ダビデの子よ」(22節)と叫ばずにはいられないほど切羽詰まっていること。さらに、イエスさまはこの女性に更なるハードル、すなわち信仰の試練を与えます。最初の試練は沈黙です。「しかし、イエスは何もお答えにならなかった」(23節)。二番目の試練は弟子たちの無理解からくることばです。「この女を追い払ってください」(23節)。そして、三番目の試練はイエスのことばです。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」(24節)。拒絶のことばに対して女性はひれ伏して叫びます(25節参照)。第四の試練は侮蔑的な意味にも取れるイエスさまのことばです。「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」(26節)。

そんな試練の数々を経ながら、女性の機知に富んだことばが彼女のこころを表します。なぜなら、この女性は自分を「小犬」になぞらえたのです。そればかりか、敵対する民族であるイスラエルの民を「主人」とみなしたのです。神の救いがイスラエルの民を通じて、異邦人にも与えられるということを知っていたのでしょうか？ また、自分自身を「小犬」とみなして、神の前でへりくだったのでしょうか？ おそらく、神さまがご自分が神さまであろうとするためにイスラエルの民を救われるのだとしたら、異邦人に対しても神さまが神さまであろうすることを示すに違いないという信仰があったのでしよう。

イエスさまは、この女性のこころに打たれていきます。「あなたの信仰は立派だ」は「あなたの信仰は偉大だ」という意味です。女性は、神さまの救いの想いというものをしっかりと捉えていたのです。

実は、イエスさま自身も信仰の試練に直面していたのかもしれませんが。イスラエルの人々の間に信仰を見出せなかったからです。ティルスやシドンに向かったのは「信じて生きてる」人を見つける旅だったのでしよう。異邦人世界に本当に信仰があるのかを試さなければなりません。その点で信仰についての試練といえるでしょう。